

氏 名 高 燕文

学位(専攻分野) 博士(学術)

学位記番号 総研大甲第 2290 号

学位授与の日付 2022 年 3 月 24 日

学位授与の要件 文化科学研究科 国際日本研究専攻  
学位規則第6条第1項該当

学位論文題目 「満蒙開拓」をめぐる言説空間——大陸開拓文学を中心に  
——

論文審査委員 主 査 磯前 順一

国際日本研究専攻 教授

松田 利彦

国際日本研究専攻 教授

劉 建輝

国際日本研究専攻 教授

浦田 義和

久留米大学 大学院比較文化研究所 客員教授

単 援朝

崇城大学 総合教育センター 教授

(様式3)

## 博士論文の要旨

氏 名 高 燕文

論文題目

「満蒙開拓」をめぐる言説空間  
——大陸開拓文学を中心に——

本論文は戦時下、満洲農業移民をめぐる大陸開拓文学の中に構築された満蒙開拓の諸相を検討する。当分野における従来の研究枠組を突破し、これまでの未発見のものを含め、国内外に散在する大陸開拓文学の作品をできる限り発掘・整理した上、日本内地から一時的に来満した作家だけではなく、満洲在住の日本人作家及び開拓民自身が書いた作品にも注目し、大陸開拓文学を一つの「自己完結」したテーマとして、その関連する作家や作品を総体的に整理、分析する。

第一部（第1章）では、まずこの民族大移動をめぐる懐疑・宣伝・動員・誘致などの諸言説が交錯する言語空間を取り上げ、その生成から拡大までのプロセスを辿る。具体的には、主に日本人農業移民送出の時間軸に沿って、四つの時期に分け、大量移民期（1936～1941年）を中心に、各時期の状況に応じて、著書、雑誌、パンフレット、絵葉書、展覧会、映画などの表象メディアを整理・分析し、それらがいかに下地となって大陸開拓文学を醸成したかを提示する。さらに、各地に散在する資料を発掘し、その中に登場する大陸開拓文学の概況——概念定義・その生成機運に関与した各文芸団体の成立・日満双方の関連事業活動——を詳しく説明する。

第二部（第2章、第3章、第4章、第5章）では、まず一時的に来満した作家とその作品について、作者それぞれの立場・視察体験、作品の内容・文学性・影響力などにより、主に和田傳、島木健作、福田清人の3人の作家と作品を選出し、また開拓地を經由した石橋湛山、石山賢吉、小林秀雄とその作品を補助的なテキストとして整理、分析する。

第2章では、和田傳の『大日向村』、「殉難」を代表とする作品群を取り上げた。まず、作者の恐慌下の農村への関心、朝日新聞社の友人からの要請、農相・有馬頼寧との接近、農民文学懇話会・大陸開拓文芸懇話会への参加、日本内地農村と満洲への視察などの事象を詳しく考察し、その文脈の中で、和田傳がどのように『大日向村』などの作品を創作するかの経緯を追跡した。次に、その具体的な作品分析において、日本内地の視点から分村移民のモデルを描く『大日向村』と、満洲現地を舞台とする小説「殉難」・その他の視察記という二つの部分に分けて検討を展開した。和田は『大日向村』の中で、移民計画の立案・実施過程に焦点を当て、大日向村の「分村神話」を讃えながら、分村移民の真実な一面も描いた。また、「殉難」・その他の視察記の中で、彼は、満洲開拓地に存在する既耕地の占用、満人労力の雇用、営農形態の矛盾などの問題に触れる一方、この「新天地」をめぐる希望についても熱く語った。これらの作品に対するテキスト分析を通して、移民政策実施と対外宣伝との落差・ズレを抽出した上、その文学表現上の限界を指摘し、作者の複雑な

心像風景を提示した。

第3章では、島木健作の『満洲紀行』及び『或る作家の手記』を考察の対象とした。島木は旺盛な興味と新鮮な感受性を持って、開拓地を隅々まで真剣に観察し、『満洲紀行』の中で、満蒙開拓という「大きな理想」への共感を表したと同時に、開拓地という実在の生活空間から浮かび上がってくる様々な問題を鋭く批判し、またその解決法を熱心に建言した。一方、来満前の随筆と『或る作家の手記』の中では、自らの作家として理解されない苦痛や政治と文学に関する矛盾した思考も詳しく記述した。これらの作品に関する分析を通して、開拓を題材とする際の国策に組み入れられる宿命を是認する上で、国策の具体的な実施形態の中に内包される不条理や欺瞞を暴き出し、それへの順応と抵抗の間に揺れ続ける作者の姿を浮き彫りにした。

第4章では、福田清人の『日輪兵舎』、『大陸開拓』、『大陸開拓と文学』などの作品を取り扱った。福田清人は大陸開拓文芸懇話会の主幹で、開拓文学の熱心な提唱者である。また彼は満蒙開拓青少年義勇軍に対してきわめて強烈な執着と興味を持っていた。満洲農業移民を日本人の真の「大陸発見」者だと主張した福田はその一連の作品において、日本記紀文学から発掘した「創造・開拓精神」を移民事業に応用し、日本人の満蒙開拓を理念的に正当化・合理化させた。その文学作品群に関する分析を通して、日本人の大陸進出を日本文学上の変革機運として捉え、「新たな文学の開拓」を唱える福田が自作中で夢見た「大きなロマン」を解析した。

第5章は、上記作家・作品の補論として、開拓地が観光化された時期に現地を訪れた石橋湛山、石山賢吉、小林秀雄の作品について考察した。満洲の産業視察を目的とする石橋の『満鮮産業の印象』、石山の『紀行 満洲・台湾・海南島』と満蒙開拓青少年義勇軍孫呉訓練所を実見した小林の「満洲の印象」を取り上げ、それぞれの作中に描かれた一般開拓民と義勇軍の生活に潜んでいる問題や彼らの目に映った開拓地の風景を確認し、内地知識人の満蒙開拓に関するイメージの一側面を整理、分析した。

第三部（第6章、第7章、第8章）では、上記の一時的な来満作家と立場の異なる満洲現地在住の日本人作家とその作品について考察する。その際、第二部と同様、作者それぞれの立場・滞在体験、作品の内容・文学性・影響力などにより、具体的に山田清三郎、望月百合子、菅野正男の3人を選出し、その文学的営為を整理、分析する。

第6章では、主に山田清三郎の『私の開拓地手記』をめぐってテキスト分析を展開した。転向後の山田清三郎は開拓地視察の目的で渡満し、一満洲在住者として、後に満洲文壇の中心的な存在となった人物である。開拓民と共に生活を送る間の見聞・体験を記したその『私の開拓地手記』に焦点を当て、そこに描かれた開拓地風景、開拓民たちの姿及びモチーフとしての「民族協和」などを確認し、作者が満洲という「複合民族の生活空間」に賭けた「夢」を析出した。

第7章では、望月百合子の『大陸に生きる』という随筆集の内容を分析した。望月百合子は一時療養のために渡満し、その後、当初の予定を変えて満洲に定住した。彼女は満洲新聞社に勤めたが、仕事の傍ら、北満・東満の開拓地を何度も訪れていた。この作品集に収録したのは本人の開拓地を視察した記録、内地に向けた大陸花嫁の宣伝、また満洲婦人文化の創生をめぐる様々な実験である。ここからは、一女流作家の開拓地に関する見聞・感想が読み取れるのみならず、「文化的上の処女地」とされた満洲で日本人女性教育に投身

する作者自らの「開拓」情熱もはっきりと確認することができた。

第8章では、菅野正男の『土と戦ふ』と『開拓地の春』の両作品について考察を加えた。視察者・傍観者ではなく、菅野正男は義勇軍の一員として、満蒙開拓実践が彼の生活そのものである。一時、論者たちに激賞され、大々的に宣伝された小説『土と戦ふ』も『開拓地の春』という雑録集も、作者の生々しい体験記として、他の作家にない新鮮感と抒情性が漂っている。その具体的な内容に関する考察を通して、厳しさと美しさを兼ねる北満の自然の中で、粗悪な居住・飲食、過重な労働、寂しさと虚しさに耐え、屯墾病などの風土病と闘いながら生活する一方、一時的に「試練」に打ち勝つ喜びを味わい、未来への壮大な夢を信じて奮闘しつつも、途中で挫折し、ついに帰らぬ人となってしまった一開拓青年の哀れな姿を浮き彫りにし、現地作家の典型的な実例を提示した。

以上のように、本論文は膨大な作品群から9人の作家の作品を取り上げ、大陸開拓文学を総合的に検証した。一連の具体的な作品の分析により、本論文において解明されたことを以下のようにまとめる。

満洲農業移民が大々的に宣伝される時代を生きていた作家たちの満蒙開拓に関する様々な言説とその背後に潜んでいる認識には多くの共通点が存在した。このことは、彼らの創作が広義的に見て、いわゆる満洲・満蒙開拓をめぐる共通した言説的枠組を超えていなかったことを意味する。一方、満蒙開拓という大きなテーマの下で統一されながらも、作家たち各自の立場、人生体験、関心の焦点、開拓地の視察体験、満洲農業移民という国策への理解の度合いなど様々な異なる要素が複雑に絡み合ったことで、それぞれの作品の内容上の独自性と多彩性を生み出してもいる。そして、このような多彩な文学表象の介入により、すでに大陸開拓文学誕生の背景として存在し、公私様々な記述が織り込まれた満蒙開拓の言説空間が一層拡大され、充実されるものとなった。

その意味で、本論文は、単に一作家、一作品を、農民文学、植民地文学、転向文学、国策文学などの枠組の中で単独に考察するのではなく、一連の作品を大陸開拓文学という全体の概念で総括した上で、満蒙開拓の記録・表象空間の生成・拡大、また日本文学における「満洲イメージ」の形成、さらに東アジアにおける人的・物的移動という三つの文脈が連動されるより大きな言説空間の中で、大陸開拓文学の生成・隆盛・影響・衰退などの過程を追跡し、その新たな位置付けを試みようとしたものと規定できる。

## 博士論文審査結果

Name in Full  
氏名 高 燕文

Title  
論文題目 「満蒙開拓」をめぐる言説空間——大陸開拓文学を中心に——

本論文は、日中戦争期に活発に創作された「満洲開拓文学」を素材とした初めての総合的研究である。近代日本における満洲イメージの生成を論じた後、「満洲開拓文学」の担い手を、日本内地から満洲に渡り創作活動を行った来満日本人作家と、満洲に定住しながら作品を生み出した在満日本人作家とに分け、計九人の作家を検討対象とした。その学問的意義としては、「満洲開拓文学」という領域の全体像を初めて明らかにしたことにある。また、それを「国策文学」という概念規定にとどめず、作品世界に描かれた作者の苦悩や満洲開拓政策の矛盾を丁寧に読み取っていった点も特筆に値する。戦後日本の国民国家のみを単位とする研究領域の設定を越えて、日本帝国の植民地主義から生じた満洲開拓文学をトランスナショナルな国際研究の視点から分析し、その研究土台を基礎づけた意欲的な研究といえる。

三部構成からなる本論文の達成点としては、次のとおりである。第一部では、満洲農業移民をめぐる言説について、満洲事変勃発以前、試験移民期、本格的移民期、移民送出衰退期の三つの時期に分け、各時期における官報、雑誌、現地案内、旅行パンフレット、絵葉書、展覧会などの表象媒体を丁寧に整理し、それらがいかに開拓文学の下地となったかを提示した。第二部では、いわゆる来満日本人作家について、その代表的な存在として和田傳、島木健作、福田清人などを取り上げ、それぞれの主要作品を創作背景に留意しながら詳細に分析し、彼らの開拓文学における旗手的な役割を解明した。そして第三部では、来満作家に対し、現地で活躍した在満日本人作家として山田清三郎、望月百合子、菅野正男などを取り上げ、それぞれの代表作の分析を通して、在満作家独自の立場とそれに由来する彼らの作品世界の特徴を抽出し、開拓文学の多様な側面を浮き彫りにした。

以上のように、従来、研究が手薄だったこの満洲農業移民をめぐる言説について様々な表象媒体を調査・整理し、中でも影響力の大きかった開拓文学への詳細な分析を通して、その全貌を解明している点にこそ本論文の画期性を指摘することができよう。

以下、評価の理由を個別に挙げる。第一に、プロパガンダ小説の文学性という問題意識のもとに、丹念に作品を分析的に読む作業を完遂したこと。そうすることによって、モチーフを含む作品固有の仕掛けや技術を明るみに出した点では、従来の作品論の研究水準とは一線を画するものとなっている。

第二に、満洲開拓文学をめぐる詳細な資料調査や構造的な整理・分析がほとんど行われてこなかった研究状況に対して、本論文はこの未開拓の研究課題に挑戦し、日中の各地に散在する当事者の手記や回想録を含む第一次資料を数多く発掘することに成功している。とりわけ、在満日本人作家の作品群について初めて研究史上、系譜的に整理・分析をおこ

ない、今後の研究の基礎を整えたことは学史上の大きな功績となろう。

その具体的な例に、本論文に付された「大陸開拓文学：主な単行本作品」をはじめとする五つの附録がある。それは、国内外の膨大な文献をつぶさに調査し、その中から関連作品を漏れなく抽出して作成された、小説およびルポルタージュに関する満洲開拓文学のほぼ完全な作品リストである。本論文の研究主題に関して、単行本から新聞・雑誌に掲載された作品や関連記事までほぼ網羅されており、さらに戦後の作品の復刻・再版情報までが付加されている。

こうした研究の基礎作業を根気よく完遂する能力こそが、先行研究を活用して、全体の論述の整合性を適切にはかり、本論文の内容を充実させたといえよう。本人の研究者としての素質を将来的に大きく開花させる可能性を強く感じさせる論文として高く評するゆえんである。

ただし、こうした丹念な基礎資料の調査・整理に基づいて、それをどういう観点で考察しようとしているのか、その分析に基づく学術的思考の錬成にはさらなる期待が寄せられる。以下、その課題を指摘する。第一に、来満作家との比較をとおして、在満作家を取り上げたことで、開拓文学全体の解明にいかなる学問的意味がもたらされたのか、その関係づけを明確にする必要がある。第二に、複合民族国家だった満洲国の性格からいっても、日本・満洲のみならず朝鮮半島・中国関内あるいは台湾をも巻き込んだ人口移動のなかで日本人満洲移民を捉える観点を、もっと打ち出していくべきである。第三に、歴史学の成果を説明材料に使うだけでなく、歴史学で気づかれなかった問題を、文学作品を通じて照射する研究の深化が今後俟たれる。

しかし、こうした課題は、あくまで本論文で達成した研究成果を土台として、次の段階に進む研究成果として待ち望まれるものにとどまる。現時点ですでに高い独自性と完成度を示す本論文は、いまだ研究が不十分な満洲文学研究において一つの空白部を埋めた点において、その学問的意義は極めて高いものがある。以上の理由をもって、本論文は国際日本研究専攻の学位を授与するにふさわしいものと審査委員の全員一致で判定した次第である。